



series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十八章

Sipad

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

38・Sipad

354.

355.

356.

357.

358.

359.

360.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
ひろ	健の妻
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者
X & Y	エドミールのボディーガード
レル・ヴァリス	H & L 財団・医療チームの医師
ヘルガ	//

38・Sipad

354.

何もないところから影のように湧いてでてきたモノを見て、エドミール殿下はちょっと怪訝な顔をした。が、それもつかの間、テラスへの外階段を駆け上がり、高いところから乱暴に放り出された女性に駆け寄る。駆け寄りながら、「ユミコ！」と口走ってしまう。

ユミコのアップにしていた髪はすっかり崩れて顔面を覆い、黒い喪用のドレスはあちこち破れ、強く引っ張られたのだろう胸元ははだけて見る影もなかった。ヘルガも駆けつけて、集まって来た警備員や兵士たちの目を遮り、レル・ヴァリスはケガの有無を確かめにきた。

その傍らで武装した兵士が"そいつ"を拘束している。

"そいつ"はフード付きの真っ黒なローブを身にまとい、仮面をつけていた。これも黒色で、口がにっこりと笑みを作っているという、人を食ったもの。まさに死神然とした不吉な身ごしらえだが、ネコにさんざん引っかかれて仮面もローブも傷だらけのぼろぼろだ。

ユミコが無事なのを知って、健はおもむろに"そいつ"に歩み寄った。"そいつ"は兵士たちの手をふりほどき、ふてぶてしくも胸を張って昂然と健に目を当てた。そして、ざらざらとした声で言った。

「こんなことをしてただで済むと思っているのかね」

健は相手を見据えたまま、ぐっと右手の拳を握り締め、いきなり相手の顔面にパンチを見舞った。居合わせた者たちが鼻白むほど熾烈な一撃だった。相手はぐらりと大きくよろめき、仮面の左半分が歪んでカケラが飛び散った。

それを目撃したレル・ヴァリスが拳を握ってすくと立ちあがり、「ケン！」、と叫ぶように言った。暴挙を止めるのかと思いきや。

「ボクにもやらせて！　ぶつ殺してやる！」

エドミール殿下もすかさず立ちあがる。「待て！　私が先だ！」

「……あのなあ」、と健。

「レル・ヴァリス、おまえは曲がりなりにも医者、そういうことは思ってても口にしちゃだめだろ！ エドミール、おたくもだ！ 素人は引っ込んでてくれないか！」

しかしふたりとも引かない。

「たしかにボクは医者だけど！ こいつだけは！ こいつだけは別だ！！」

「素人もへったくれもあるか！ どうして私が引っ込まねばならんのだ！！」

「ええいいうさい！ まず、オレには殴るに値する理由がある」

「ボクにだってあるよ」

「私にもだ」

"そいつ"の後ろに現れたスクナが拘束役を引き継ぎ、"そいつ"に耳打ちする。(あんた、相当恨みを買ってるんだなあ)

黒衣の怪しいモノをめぐって、彼ら三人は「殴る、殴らない」ではなく、殴る順番を決め始めた。ヘタをしたら三人で殴り合いになるんではなかろうかと思われた。

兵士たちは、(殿下たちはなにをお揉めになっておられるのか)と居心地のわるい思いをしつつ、成り行きを注視していたので、さきほど大活躍したネコがまだ毛を逆立てているのに気づかない。

ついにユミコが口を挟んだ。「エドミールさま」と。そのひと声で三人の諍いはぴたりと止まり、呼ばれた殿下は「はい！」と振り返る。

ユミコは乱れた髪を片手でかきあげ、もう片方の手はバラ園の上方を指さしていた。みんな、特設舞台で……テラスで……繰り広げられているすったもんだに釘付けになっていたから、誰も反対方向など見ていなかった。ユミコの指さす方向へと頭を巡らせたエドミールは——絶句した。声を絞り出すのに長い時間がかかった。

「——シパド——」

355.

ボディーガードXはその女を知っていた。ブリュッセルで一度会った。ワインディ・サトウとの取引現場に現れた金色の女だ。長い髪も肌も、瞳も、すべてが金色。

あの時は目もくらむ金色の光で細かなところまではわからなかつたが、今は鮮やかな赤い色の衣装を身に着けているのがわかる。高く張り出した胸、細く締まった腰、長い脚という見るも見事なボディに付けているのは真っ赤な、戦闘服か軍服のような衣装。

そもそも——彼はこの女を知っていた。

かつて彼はメッサナのボムソワール家で働いた。ボムソワールに集う芸術家を実務的に補佐するという仕事だった。

ある日とつぜんボムソワールの娘メルノが災難に遭ったとき、市民らの凄まじい剣幕に度肝を抜かれ、息を詰めるようにして成り行きを見守るしかなかった。

市内に住み、通いで働いていた彼らは屋敷を襲った火災には遭わずに済んだ。そういう人間は何人もいて事件後ひそかに集まり、グループを作っていた。

次いでアンベレオ王国の先遣隊・ベレオーサ家の人がやってきてパンテオラ総督を連れ去った。これでメッサナ市は終わった。

この女はそのベレオーサ家の代表で、前総督を処分した後、新総督の座についた。

シパド。

恐ろしい女だ。生来のわがままな性格に加え、アンベレオ王国の指示のもとに旧メッサナ市を懲罰し、ベレオーサ市を打ち建て、全権力を握った。この女のひと声で『首がとぶ』というのは比喩ではなく単に事実だった。

旧メッサナ市民は一人残らず恐れ、怯えた。一方で、新総督に対する反発を育てるXらのグループの存在もあった。

ある日、新総督の婚約が発表された。相手の男は、市内に滞在中の外国人で、自分から売り込んだのだという話が伝わり、Xらの怒りは燃え上がった。

「許すまじ」という声は膨れ上がり、ついに暗殺決行に到った。その場で彼ら刺客は驚愕する。ボムソワール家に出入りしていた芸術家ではないか！ それも『バイスロイ』(黄金門の権力者の副官)というふざけた名前を名乗っていた外国人。Xは我を忘れて叫んでいた。「裏切り者！！」、と。

356.

シパドに言わせれば『愛しぬいたひと』であり、彼を手に入れる、あるいは、手に入らないことに対する行動は、とても正気とは思われない、常軌を逸する凄惨なものばかりで、次々と犠牲者が出了。

そこへ——なんということか。バイスロイの方から結婚の申し入れがあった。シパドの暴虐を止めようと考えたバイスロイの命がけの策だったのだが、暗殺者の存在はシパドを幸福の絶頂から突き落とした。

彼女の怒りと暗殺者を突き止めようとする執念は凄まじく、バイスロイが持っていた黒曜石のナイフからマミヤの存在が割り出された。マミヤはこの一連の筋書きから巻き添えを食ったのである。そしてマミヤを守ろうとして果たせなかったヒューダーの、自身への失望。

マミヤとヒューダーと、両者を一度に失ったと知ったイリチヤは火の精霊と化す——

なかには、当時のXの知りようがなかったこともある。一方で、Xだけが知っていることもある。バイスロイの死体を回収に来るだろう者……おそらく婚約者のシパド……の悲嘆の様子を見てやろうと、Xは死体を放置し現場に身を潜めていた。そこで彼は信じられない光景を見た。

空が白み、日の出が近づくと異変が起きた。死体から流れ出た血液は凝固するどころか脈打ち始めたのだ。そして植物が芽を出した。見る見るうちに芽は成長し、蕾を持ち、朝日が当たるといっせいに花開いた。そして死体を覆い隠してしまった。

伝説にある黄金門の血だと、Xは悟った。魔法のごとき生命力を持つという、黄金門の血液の力の顕現だ。『バイスロイ』とはふざけた自称ではなかったのだ。

Xは、まがりなりにも仲間だと思っていた者の裏切り行為が許せなかった。しかし、後のことまで考えが及ばなかった。我に返って初めて恐怖に襲われる。

黄金門の血の持ち主を手にかけたことへの自責の念と罪悪感、そして婚約者を奪われて怒り狂った女の、報復。

彼の意識は急速に薄れていく。

新領地行幸のアンペレオ国王到着を寿ぐ祝杯が誰かまわず配られ、そこにはもはや正気を維持できないほどの薬物が盛られていた。旧市民は一人残らず、大熊座から飛来する神々に捧げられる運命にあった——

357.

ボディーガードXがそれらの記憶を思い出したのは国防軍に入隊してからだった。体力と知力、自分自身に自信があつての入隊だった。そしてすぐに、同期のYと共に皇太子のボディーガード候補となる。

記憶は段階的に甦ったのではなく、数々の断片がランダムに浮上し、なにがなんだかわからなかつた。訓練の厳しさに頭がおかしくなつたのかと思ったほどだ。しかし、やがて記憶の時系列が整つてくる。すると——自分はエドミール殿下を知つてゐることに気がつく。

そうだ、かつてメッサナでバイスロイと名乗つてゐた芸術家、自分が刺殺したあの男ではないか

同僚のYをそれとなく探つてみるが、彼には自分のような記憶はないらしいし、彼と知り合つたという記憶もない。当時は殿下との接点など……自分が手にかけた以外は……ほとんどなかつたのだから、自分が口をつぐんでいれば、そんな過去は誰も知りようがない。そう自分に言い聞かせ、殿下のボディーガードを務めてきた。殿下をマスターと呼び、ほぼ半生を共に生きた。

しかしあの時。イリチャという少年に輸血が必要になつた、あの時。黄金門の特殊な血のことを思い出した。今の世にあの血の持ち主がいるとすれば、マスター以外にあり得ない。Xはマスターのもとへ走つていた。

マスターはかつて自分を罵声とともに刺し殺したのがXだったとは知る由もない。X自身が明かさないかぎり知ることはない。

おそらく、とXは思う。自分がなにか大失態でも犯してクビにならないかぎり、これからもマスターを守り続けるのだろう。公的国際デビューを果たしたこれからが本番なのだから。もし銃弾が飛んで来たらマスターの替わりに受け、反撃するだろう。どこまでもマスターについていくだろう。

誰かに、何故？ と訊かれれば、黙って渋い笑みを浮かべるだけだ。内なるXは答えを持ってい る。それは贖罪なのだ。

Xは、はたと我に返った。渋い笑みを浮かべて回想している場合ではない。あの恐ろしい女総督、シパドが、今日の前にいる。真っ赤な軍服のような衣装は旧メッサナを制圧した時の先遣隊のものだ。

*

こんな形でこの女と再会することになろうとは、エドミール殿下は思ってもみなかった。彼の過去の妻たちを再起不能に陥らせたのはおそらくこの女だ。そして今まで現れたのはいかなる理由か。いや。おそらく、シパドの標的はユミコだ。

決着をつけねばならん、エドミールはそう思った。さもなければこの女は、いつまでも、どこまでも追いかけて来るに違いない。

358.

かなり高い空中に浮かんでいたシパドは、テラスの高さまでゆっくりと降下してきた。通常の物理存在ではないということ。

「——ひさしぶりだな」

エドミールがぶすりというと、シパドは唇を持ち上げるようにして笑った。

レル・ヴァリスは……レル・ヴァリスともあろうものが……じつとりと脂汗にまみれているし、ヘルガは我を忘れたようなまなざしでじっと見つめている。ヘルガはなにしろ初対面である。

シパドはしばらく笑っていたが、やがて口を開いて出てきたのが、

「バイスロイ。あたしとの結婚は？」、だった。顎を突き上げるような仕草はかつてのままだ。

「…………」

「まだ有効な話だと思っているのは、あたしだけか」

声には嘲笑が滲んでいるようだ。

「シパド——話さねばならぬと思っていた。思い返せば、最初に、私がそなたをあざむいた。そう、一度だけではない。そなたの気持ちを知りながら、私は嘘についてそなたを騙そうとした。その場しのぎの嘘で騙せると思った。私は誠実さのカケラもない人間だ」

ヘルガは少なからず、驚く。バイスロイという人は権力慣れしていて態度は大きいが誠実な人だと思っていた。自分から己の不誠実さを明かそうとは。

そしてシパドは横を向き、ふふん、と鼻を鳴らした。金髪が眩しく揺れる。

「そんなことは、知っていた」

「…………」

「そなたがあたしのことをなんとも思っていないことなど、気がついていた。が、自分の気持ちはどうにもならぬではないか。あたしはひと目でそなたに惹かれた。魂をつかまれて持って行かれた気分だった。自分で自分がどうにもならなかつた。

あたしはずっと考えていた。そなたはボムソワールの屋敷の焼け跡で何を思っていたのだろうと、あたしはそのことにずっと悩まされた。それが……ようやく、わかった」

シパドの視線はエドミールの背後に注がれていた。

エドミールは唇を噛んだ。シパドの標的はやはりユミコだ。

「そなたはあの時から一貫して、ひとりの娘を思っていた。そうだろう？」

「……いかにも」

シパドは、いたたまれない、というような身振りをした。頭をふり、行ったり来たりし始めた。彼女は演技しているわけではない。芝居がかっているというのではなく、気持ちが高ぶって、なにかしら表出せずにいられないのだ、エドミールの芸術家の目にはそう映った。

「そなたはあたしを韜晦した。自分を包み隠し、あたしを騙そうとした。けれど理由がわからない。あたしは混乱し、傷つけられたと思った。残酷で！ 卑劣！ そなたはそういう人間だ、そなたの言葉どおり、不誠実な人間だ」

「二万年という時間は長い。あたしは數え切れぬ回数肉体を持ち、地上で生きた。生まれたときから奴隸だったこともある。飢えたわが子を失くしたこともある。道化師だったことも、大国の王だったこともある。蔑まれ、足蹴にされ、見向きもされず、逆にかしづかれる。さまざまな人生を生きた。けれどもあたしの胸中に、いつも、かならず、核のようなものがあった。それは肉体を持つたびに現れた。あたしを騙した男。もう一度、その者に出会い、決着をつけねば、あたしは永遠に転生を繰り返すのだと、気がついた」

シパドが語る途中で、スクナが取り押さえていた仮面の男が、ふと顔をあげて言った。

「それ、ワタシのこと？」

「んなわけないだろ」「話ちゃんと聴いてたのか？？」「黙っときなされ」

健、レル・ヴァリス、スクナからいっせいに突っ込みがはいる。

「い、いや、でもね」まだ何か言おうとする男に三人が一斉に蹴りをいれて黙らせた。

「話の腰の折りついでに、ひとつ、訊きたいのだが。そなたは今生では肉体を持っていないのだろう？？ つまり……」

「この時空で大きな動きがあった。ベネトナシュがやって来たのもそのためだ」

「え——」

「それはあとで話す。ベネトナシュ、口を挟むな。ええい、なんだっけ、肉体を持たずにここへ来るのは、人間に関わるのが目的ではない。ベネトナシュを追跡した結果だ。魂体のまま人間と接触

するのは禁じられている。エネルギーが違い過ぎて人間の方が壊れてしまうからだ。なのだが……この世界にそなたがいると知り、興味本位でそなたの女たちに近づいてしまった」

「三人の妻たちのことだな。なるほど、ずいぶんなことをしてくれたものだ」

自分を騙した不誠実な男、とシパドからずばり明言され、エドミールの自我はひじょうにへこんだが、三人の妻たちに落ち度はない。彼女たちのためにできる、それが精いっぱいの反撃だった。ほかになにも考えていなかったし期待もしていなかった。だから、

「すまぬことをした」というシパドの言葉に、エドミールは思わず相手の顔を見た。この女の口から出るとは思えないひとことだったのだ。

「あたしの魂体は人間に大きな影響を与える。そうわかっていても、かつて見知った顔を見つけると、懐かしさのあまり近寄りたくなる」

シパドの視線を受けて、マミヤはこっそり眉をひそめる。(な、懐かしい、ですって？？？)

「そしてまだ浄化されない己を知る」

浄化、と言ったのか？？ 浄化？？

またもやシパドが発した意外な言葉に、エドミールはまじまじとその顔を見ずにいられない。この女にいったい何が起こったのだ？

「——バイスロイの魂を持ち、バイスロイの記憶を持つそなたに会えたのは予想外だった。こんな機会は二度とないだろう。これでやっと、言うべきことが言える。あたしは、そなたを許す」

あまりに唐突で、あまりに思いがけない言葉だった。許す、とは——

「そなたがあたしにした様々な仕打ちを、すべて許そう。そしてあたしの婚約者だったそなたを手にかけた者をも、許そう」

Xがあ然としたのはいうまでもなく、エドミールはからからに乾いた口をむりやり動かした。「なぜ」、と。

健はシパドの指先が自分の方へ向くのを見た。彼女は健を指さした。

「この男が言った。本当にバイスロイを愛しているなら、彼に関わるなど」

「…………」

「なるほど、と思った。そういう関わり方があるのか、とな。妙に納得できた。だからもう、そなたと話し合うことなど考えていなかったのだが、たまたま"こいつ"を見かけたのでな」

"こいつ"は裏返った情けない悲鳴をあげて縮み上がった。

「ワ、ワタシにも関わらないでください～」

「そもそもまい。ベネトナシュ」

360.

「ベネトナシュは、ある計画を実行するための先鋒だった。そのためにこの時空の時間にして、三十年前、この地へやって来た」

「この時空で大きな動きがあったと言ったな、『ある計画』とはそのことか」

三十年前のソフィアの失踪とベネトナシュは少なからず関係があるという予感から、健は口をはさまずにいられなかった。

「それは……そなたが知らずともよいことだ。あたしが既に潰した」

「やっぱり！ やっぱりシパド、あんたの仕業かね！！」

「そうだとも」

「お、おのれ～～」

業を煮やして、健はシパドとベネトナシュの間に割り込んだ。

「話がぜんぜん見えん！！ 詳しく話せ！」

38・「Sipad】

39・「」へ続く

あとがき

この人、なんでここでこんなこと言うんだろ、と、引っかかりを覚えることがあります。で、ずっと後になって、あーそうだったのか、と。

そのひとつが、第四部・第二十六章の健のセリフ、『もし、きみが、本当に彼を愛しているのなら云々』。

セリフは、発する人の言いたいままに言ってもらって、できるだけ直さないようにしていますが、そのまま伏線になっていることがあるわけで、こういうことがあるから書いて面白いのです。

2025年12月16日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十八章 Sipad

2025年12月20日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

[imagescreate](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社